

脱近代社会の知の担い手として 大学生と大学教育との関係を見る

溝上 慎一

みぞかみ・しんいち
京都大学・高等教育研究開発推進センター

本号の特集テーマは、「大学生の獲得すべき学力・リテラシーと将来展望——生き方・アイデンティティ・主体性——」である。「大学生の〜」というテーマの背後で暗に問題としているのは、大学教育である。しかも、クラブ・サークル活動を典型例とするように、大学がその活動のための環境（たとえばグラウンドや部室など）を整備し、学生たちがそれらを有効に活用した結果、彼らは大学の預かり知らぬところで勝手に成長していた、という話ではない。どちらかといえばそれは、大学の教職員が学生にどのように自覚的に教育活動を行っていかばいいか、という話である。

なぜこのようなことをまкруらで述べるかというと、特集テーマに挙げられているキーワードのどれを見ても、それらがこれまでの大学教育でここまで切実に問題視されたことがあったのか、否なかったのではないか、という「現代的特質」を自覚したいからである。

そもそも特集テーマの主題である大学生の「学力」とは、具体的に何を指すのだろうか。小中学生の学力ではなく、大学生の学力である。そんな議論がこれまでどれだけあったのかということをも真正面から考えてみたい。もちろん、大学入学以前に身につけていなければならぬ（とされる）能力が、大学生になっても身につけていないという意味での学力低下論争はあった。しかし、それは大学生として身につける学力を問うものでは必ずしもなかった。また、「リテラシー」が取り上げられるのも、一般的にいえば、高度かつ複雑に進展する社会で、学生たちが将来強く生きていくために必要な能力の獲得を目指していることだろうと推察されるが、大学教育との関係で考えるとき、それらは具体的に何を指すのかということをも真正面から考えてみなければならぬ。昨今の大学教育改革を見ていて、何

でもかんでも必要だとされて、大学教育プログラムの絶対量が上昇し続けていると感じざるを得ない。これまでのプログラムとの関係、全体的な視点をもって、改めてじっくり検討をする必要がある。

他方、特集テーマの副題についてであるが、果たして知識・技術の伝達を越えて、生き方やアイデンティティ形成といったおおよそ個人の価値・人生領域に、大学が自覚的に関与していくことができるのだろうか。最広義での「大学」という環境で、学生が正課・正課外の活動を通じて価値やアイデンティティを自然に形成していくという話ではない。大学人が教育という自覚的営みを通して、学生個人の価値・人生領域に関与していく必要性があるという話なのである。神でも聖職者でもない大学の教職員が、どれほど学生たちの価値・人生領域に踏み込めるというのか。知識や技術を教える、理解させるといふ営みとは違う。しかも、大学の教職員が経済的には自立して社会で働いている大人であるとはいえ、現代社会では、その大人でさえ価値や人生領域は絶えず揺られて不安定なものであることが多い。教えてもらいたいのはこつちだと、いたくなることさえ珍しくない。しかし、目の前の学生たちを見ていて、そういつていては前に進まないという現実がある。特集テーマの副題は、このような現実から出てきている。

以上のように考えてみると、特集テーマの主題は、「現代」

という時代において大学教育の枠組みと機能が大きく揺らぎ、新たな姿へと再構成されようとしていることを示唆している。わが国だけを見ていれば、一九九〇年代初頭以降大綱化があり、バブル経済社会が崩壊して日本独自の労働システムが崩壊し、少子化、大学経営の問題が深刻化する、成果主義や競争が極端に導入され格差社会が進行する、そうしたなかで起こってきた問題であるように見える。しかし、世界的に巨視的に見れば、先進諸国では大同小異で起こっている問題である。一つ一つは日本独自の展開であっても、全体としては高度な知識・技術社会に支えられて発展してきた近代社会からの別次元への脱皮の過程なのである。

近代社会をどの次元でとらえるかが、この短い文章のなかでは一概にいえないが、多くの近代社会論が「脱近代（ポストモダン）」と称して新しい姿を論じていることは、この脱皮の過程を端的に言い表している。産業革命に端を発した近代社会においては、高度化する知識・技術をできるだけ身につけ、古い社会から脱却・発展していくことが社会や国、個人の大きな課題とされたが、新しい社会においては、一個人が身につけることのできる一定の範囲を越えた高度で複雑な知識・技術を、個人の意味体系のなかで取捨選択し再構成することが大きな課題となっている。高度で複雑な知識・技術を操る知の主体が、新しい社会の担い手として求められている。大学教育の枠組みと機

能が極端に揺らぎ、極端に期待されるゆえんは、たぶんこのあたりにあるのだろうと私は考えている。

他方で副題は、学習主体である学生個人の価値や人生領域が大きく揺らいでいることを示唆している。新しい社会の到来において、知識・技術を取捨選択・再構成する主体の能力だけが問われるのであれば話はまだわかりやすいが、実は主体が知識・技術を取捨選択・再構成していくためには、そのための能力の獲得のみならず、その能力を活かす個人の意味体系の構築・確立までもが必要とされる。それは、大学生活から対人関係、恋愛、家族、職業といったさまざまな側面にまで及ぶ実に広範囲の価値・人生領域の問題であって、その一つ一つについて個人の選択・決定が執拗に、矢継ぎ早に求められる。それは、親が「私の子供はやる気を出せば勉強ができるのです」と言っている言とけっこう性質の似ている問題で、たしかにやる気が出

れば勉強ができるのかもしれないが、実際にはやる気が出せるか出せないかは広い意味では能力のようなものであったりすることが多い。心理学的にいえば、統制可能 (controllable) 要因であるが、この統制というのが実に難しい。とても厄介な問題である。

わが国の本格的な大学教育改革もおおよそ十年を過ぎた。最近では、当初の組織、カリキュラムなどのハード面の改革を越えて、ずいぶんと教育の中身、学生の成長次元を問題とするようになってきた。しかしそれに合わせて、単に学生がまじめに勉強をする、授業がわかる、満足するといった話では済まないことも露見してきた。本誌の特集テーマはこのような文脈のなかで組まれているものであり、少しでも多くの識者の見解、具体的な実践例を寄せ集めて、この難問への解を見出すきっかけとなればと願う。